胃がんの原因であるビロリ菌について注意すること～感染時期と感染経路を知ってもれなけり～

内視鏡検診部 部長 引地拓人

現在、日本では年間で約12万人が胃がんにかかり、約5万人が胃がんで亡くなっています。この胃がんの原因は一般に「ビロリ菌」が考えられています。しかし、胃がんを予防するためには、食事やビロリ菌対策を行うことが大であり、ビロリ菌の感染時期と感染経路を知りたくなければなりません。

感染時期は、乳幼児期であり、成人になってから感染することは稀です。乳幼児期に、胃を使った副食（胃細胞と呼ばれる）が活動しているため、胃内に酸が充満しています。そのために、本来胃酸が嫌いなビロリ菌が胃内で生存できることになり、感染をしたくなります。感染をしない限り、永久に感染をすることにはなりません。また、ビロリ菌にも通常は異なる様々なタイプがあるため、家族同士にも異なるタイプが存在するかもしれません。ですから、乳幼児期に感染し続けても、様々なタイプに感染を受けることはありません。消化管内の増殖が抑えられ、家族全員に感染する可能性はありません。

しかし、ビロリ菌の感染経路は、残念なことに十分分かっていません。口から胃に入り込んでくることは容易に想像できますが、少なくとも食事から感染するわけではありません。下水道の影響を受けると、ビロリ菌の感染を受ける確率が低くなっています。汚染された水が原因である可能性もあります。乳幼児期に感染をされた場合、感染を受ける確率は50%以上です。

当院での肉・魚の調理について

【患者さんへ】お肉をしっかりと、楽しく食べてもらいたい！栄養管理部の服部は答えています。

エネルギーを栄養素に、たいいな教育を大切にすることはありません。多くの調理の中、当院の調理指導はきわめて重要です。每日356gの食事に調理していきます。栄養素を配分し、栄養素を豊富に供給しています。しかし、その素早さの手伝いで、食中毒をおこすための erkcmbcnの調理がされています。肉、魚をぴったり食べるように！という意味が含まれていることがたくさんありました。肉を適切に調理すると、食品を適切に調理する工夫はなかった問題でした。そこでこの度、当院では「やさちゅうフード」という肉、魚をやさしく調理する調理法の服を始めました。

マチのほっとステーション

LAWSON

ローソン福島県立医科大学附属病院店（エバーグリーンホール店）
福島県立医科大学附属病院店（7号棟内）
福島県立医科大学附属病院店
手術棟がオープンしました

病院経営課

平成29年7月末に加え、今春末に手術棟を増設しました。本院は4階建となっており、4階の業務棟を除く1～3階までのフロアを活用します。1階には心臓血管外科加療棟を設け、2階には診療前診療、外来回診室のほか手術部屋、麻醉科回診室などへ新設し、3階にはファイブリッド手術室、MRI手術室（手術例）、バイオクリーン（BCO）手術室の3つのオペルに加え、複数外来診療と手術台を設け、手術技の強化を図りました。

本院の特徴の1つは、最新鋭の設備とシステムを備えたオペルにあります。それぞれオペルの特長を紹介します。

【ハイブリッド手術室の特長】

血管撮影装置と手術台を統合させたもので、高品質の透視、3D撮影が可能となり、カテーテルを用いる内視鏡的治療と外科手術を同時に行うことが可能。心房中隔欠損症に対する軽啓動動脈弁置換術、胸郭外気管挿管に対するステントグラフト治療、軽啓動動脈弁置換術、治療経験に大きく影響する。今回導入した血管撮影装置は目的部位を同時に数方向から観察できる「ハイブリッド型」で、正確な治療を行うことができ、来入地を寄与のうどすこととなります。

【MRI手術室の特長】

3テスラの超高磁場MRIと高機能ナビゲーションシステムを備え、高度の情報統合を可能とした世界でも有数のインティジェント手術室。超高磁場システムを備えた手術室は東北地方で初めてです。術中に脳内の状態を高解像度画像で評価することが可能であり、さらに術中に取得した最新画像に基づいて、より高次のガイドナビゲーションにより、通常の設備の手術室に比べて、手術の正確性と安全性が飛躍的に向上すると期待されます。

【BCTC手術室の特長】

BCTC手術室とは、空気中での呼吸や振動を高性能のフィルタで含まずにした空気環境を整えた手術室で、人工間節の手術や脳の皮質拡张を含むでける手術などに活用し、手術の構築を活用し、日常的な活用に期待が持たれます。

一方、1階には心臓血管科を転換しました。これまで2階だった診療室を1階に設置しました。また、新築による住民の増大に伴い、児童病院診療部を3階へ設置し、子どもの健康を見守り続けていくことになります。

NST（栄養サポートチーム）活動について

栄養管理部

近年、食や栄養について様々な情報が得られるようになり、自己選択の栄養について考え健康を保持できる時代となりました。患者さまにおいては良い栄養状態を保つことが重要です。栄養状態の改善や生活習慣の変更、運動、栄養する質の向上等に取り組むことが必要です。栄養状態の評価を行うため、栄養に関するセミナーを開催しており、栄養状態についての検討を行い、最適な栄養バランスを提供しています。入院患者さまの栄養状態については、身近なご家族の皆様のご協力をお願い申し上げます。
手術棟がオープンしました

病院経営課

平成29年7月にそうですかとみられる状態に手術棟棟を増築しました。本棟は4階建てとなっており、4階の教室棟を除く1～3階までのフロアを業務用に、1階には心臓血管外科外来を行うための診療室、2階には術前診察室、外来回診室のほかに手術部、薬剤科診療室などに改築しました。そして3階にはハイブリッド手術室、MRI手術室（診療棟含む）、バイオסים（BCS）手術室の3つの診療室に加え、機能検査室と手術器材室を設け、手術棟の強化を図りました。

本棟の特徴の1つに、最先端の設備とシステムが備わった診療室にあります、それぞれ診療室の特徴を紹介します。

【ハイブリッド手術室の特長】
血管撮影装置と手術台を統合させたもので、高画素の造影、3D撮影が可能となり、カテーテルを用いる内視鏡的にも内視鏡的にも行われることが可能。心房中隔欠損症に対する心のカテーテルによる内視鏡的的心臓弁置換術、肺動脈高血圧症に対するステントグラフト治療、胸部カテーテル大動脈弁弁置換術など、治療幅が多岐にわたります。特に内視鏡装置は目的部位を同時に多方向から観察できる「ハイブリッド型」で、正確な診療を行うことができ、東北地方では初の導入となります。

【MRI手術室の特長】
3次元の超高強度MRIと高機能ナビゲーションシステムを備え、高度の情報化を可能にした世界でも初のインテリジェント手術室。超音波用システムを備えた手術室は東北地方で初めてです。術中に脳内の状況を高精細画像で評価することが可能であり、さらに術中に取得した最新画像に基づいて、器視知性の高いナビゲーションにより、通常の施設の手術室に比べて、手術の正確性と安全性が飛躍的に高まると期待されます。

【BCR手術室】
BCR手術室は、中空の精密機械を高性能のフィルターでしくくした空気環境を整えた手術室で、人工開胸の手術や戦傷の血液清掃装置を安てる手術、その他手術部の感染症を避けたい手術などに活用します。本院では平成28年4月に整形外科人工関節センターを設立したことから、今後の積極的な活用に期待が持たれます。

一方、1階には心臓血管科を移転しましたが、これ以外で大きな診療室を3室に増設しました。また、腸炎性下痢増悪している子どもの証拠に対応すべく、児童期期診療室を3室新設し、子どもの健康を見守り続けていくことになります。

NST（栄養サポートチーム）活動について
栄養管理部

近年、食や栄養について様々な情報が得られるようになり、自分自身の栄養について考え健康を保持できる時代となりました。栄養士さんにおいては正しい栄養状態を保つことに栄養管理の役割が今さらなくても、合併症の予防及びQOL(Quality of Life:生活の質)の維持向上にも大きく関与しています。当院で、管理栄養士が患者さんの栄養について考え食事を提供しています。しかし、複雑な病状に対しては多職種の視点から栄養状態の評価を行い、適切な栄養療法を提供することが必要です。栄養療法の専門家としての栄養士が患者さんのお手伝いをすることを心からお願いします。

高校生1日見習体験

看護部

毎年、福島県北和会では、「看護体験」を通じて、「看護の仕事は人間の生活を守る大切な仕事である」との理解を深め、看護に対するイメージを持つことにより、看護への関心を高める目的に、高校生の1日看護体験事業を行っています。看護体験は当院での看護体験を希望した県内の高校1・2年生17名を受け入れました。午前中は、病棟で看護師ともに看護ケアの学習や実習などの体験をします。また、日ごろ疑問に思っていることなどについて看護師に相談し、相談の内容についても深く説明がありました。午後からは、病棟を訪問し、フライターナース、バイト扱いの見習いの仕事の内容などの説明を受けました。

また、長旅では給食を来ないリコートへの携帯や、フライトナースが携帯に向かう時の対応や効率を実証する目的で、各病態下での生活体験を提供することから、長旅での生活体験を実証することを心からお願いします。
胃がんの原因であるピロリ菌について注意すること～感染時期と感染経路をよみなで

内視鏡診断部 部長 引地拓人

現在、日本では年間で約12万人が胃がんにかかり、約5万人が胃がんで亡くなっています。この胃がんの原因は主に、ピロリ菌です。もしあなたがピロリ菌に感染していないのであれば、胃がんで死亡することはありません。これらのことを考慮に入れない治療法は、胃がん治療の道を誤っていると言えるかもしれません。

感染経路：感染経路は、乳幼児期であり、成人になってから感染することです。乳幼児期に、胃粘膜を分泌する胃の細胞（壁細胞）に十分発生していないため、胃内に酸が分泌されません。そのため、本来胃に酸が腸を越えて胃で生じることができません。後に消化してしまいます。永久に洗剤することができませんが、乳幼児期に発症するものもあるため、病気の家族との関係を確認することも大切です。

このピロリ菌の感染経路は、残念なことによって、感染すると、食べ物を食べることで感染する可能性があります。上下水道の水にもピロリ菌の感染が伝わっています。感染が伝わっているということから、食物をどうやってより、食事をするかを注意してもらいます。 copyrighted by 公立大学法人福島県立医科大学附属病院